

千葉県八千代市

桑納前畑遺跡

1978・3

睦小学校北方遺跡調査会

## 序 文

近年、急激に開発の進む本市において、その変貌は著しいものがあります。山林は切り開かれ、台地は削平され赤土を露出し、谷は埋められ、清水は濁れ、地形は日増しに様相を変え、忽然と宅地が出現している現在です。この開発によって、人々の生活水準を高め、社会の要求を実現させて行く為に欠くことが出来ないと同様に、こうした目の前の要求を満たすだけでなく、祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた、かけがえのない民族遺産（文化財）を不注意な行為により失なうことのないように、昭和50年の文化財保護法の改正により、規制強化され、本市においても事業者と事前協議制度を確立し、文化財の破壊を未然に防止するよう努力してまいりました。

今回「桑納前畑遺跡」については、睦小学校の児童の増加に伴ない教室が不足いたし、この地に校舎を建設することになりました。「遺跡」と「校舎建設」どちらも重要な問題で、最善の方法を求めて再三協議を重ねた結果、記録保存の処置を講ずることになりました。

調査は溝口勝美氏に調査主任を依頼して、昭和52年夏に実施され、多くの成果を上げることが出来ました。

おわりに、この調査の実施から報告書の作成まで快く引受けられた溝口氏をはじめ、調査員、調査協力者各位に対し、厚く感謝申し上げますとともに、その他関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

昭和53年3月

睦小学校北方遺跡調査会会長  
八千代市教育委員会教育長

市 川 浩 一

## 例 言

1. 本報告書は、八千代市立睦小学校校舎改築工事に伴う、千葉県八千代市桑納<sup>サノナ</sup>170番地ほかに所在する睦小学校北方遺跡（全国遺跡地図・千葉県 遺跡番号 6-256）の調査報告書であるが、この遺跡自体は広範囲であるため、本調査地域の小字名をとり、桑納前畑遺跡と名づけた。
2. 本遺跡の発掘調査は、睦小学校北方遺跡調査会を組織して実施した。
3. 発掘調査は、昭和52年8月5日より9月9日にいたる間で行った。
4. 本報告の遺物整理は、調査参加者全員で行った。
5. 本報告の編集・執筆は、溝口を中心として、柴本、吉野、岸本、出口が行い、伊藤、平野、萱野、根本、吉川、寺内らが協力した。執筆者名は、文末に記し、その文責を明らかにした。
6. 本報告の作成にあたり、出土遺物の実測、トレースは、岸本、出口、吉川が行い、写真撮影は吉野が行った。
7. 発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々の協力をいただいた。末筆ながら記して深く意を表す次第である。

千葉県教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、八千代市教育委員会、財団法人八千代市開発協会、八千代市立睦小学校、株式会社八千代給食センター、荒木誠、上野純司、牛房茂行、築比地正治、村田一男、野中徹、山田常雄（敬称略）

# 本文目次

## 序 例 言

I. 調査に至る経過	1
II. 調査組織	1
III. 位置と歴史的環境	2
IV. 日誌抄	5
V. 遺構の概略	10
VI. 住居址	10
VII. 掘立柱建物址	21
VIII. 土 城	24
IX. 特殊遺構	30
X. グリッド	32
XI. 表採・その他の遺物	33
XII. ま と め	34

## 挿 図 ・ 表 目 次

第1図 位置及び周辺地形図	3
第2図 グリッド設定図	4
第3図 発掘区と遺跡周辺地形図	*
第4図 遺構全体図	8・9
第5図 第1号住居址実測図	11
第6図 第1号住居址遺物出土状況	12
第7図 第1号住居址カマド実測図	13
第8図 第1号住居址礎出土状態	14
第9図 第1号住居址出土遺物実測図	15
第10図 第2号住居址実測図	16
第11図 第2号住居址遺物出土状況	17
第12図 第2号住居址カマド実測図	18
第13図 第2号住居址出土遺物実測図	19
第14図 掘立柱建物址土層断面図	21

第15図	掘立柱建物址実測図	..... *
第16図	掘立柱建物址出土遺物実測図	..... 23
第17図	土坑遺物出土状況及び断面図	..... 25
第18図	土坑出土遺物拓影図	..... 27
第19図	土坑出土遺物実測図及び拓影図	..... 28
第20図	土坑出土土錘実測図	..... 29
第21図	特殊遺構出土遺物実測図及び拓影図	..... 31
第22図	グリッド内出土遺物実測図及び拓影図	..... 32
第23図	表探・その他の出土遺物実測図及び拓影図	..... 33
第1表	第1・2号掘立柱建物址柱穴表	..... 22
第2表	土錘計測値表	..... 29

## 図 版 目 次

第1図版	遺跡付近航空写真
第2図版	遺跡全景 1. 北側より遺跡を望む 2. 東側より遺跡を望む 3. 西側より遺跡を望む
第3図版	発掘風景
第4図版	グリッド開設状況 1. 全グリッド完掘状態 2. 一部遺構確認状態
第5図片	遺構確認状態 1. 溝状遺構の落ち込み全景 2. 溝状遺構の落ち込み近景
第6図版	第1号住居址 1. 遺物出土状態 2. カマド付近遺物出土状態
第7図版	第1号住居址 1. カマド除去後の状態 2. 竈出土状態 3. 坑出土状態
第8図版	第1号住居址 1. 住居址全景 2. 住居址と溝状遺構 3. 住居址と溝状遺構の切り合い状況
第9図版	第2号住居址 1. 遺物出土状態 2. カマド左側遺物出土状態(南東より) 3. カマド左側遺物出土状態(北西より)
第10図版	第2号住居址 1. カマド 2. カマド掘り方 3. カマド縦断面

- 第11図版 第2号住居址  
1. 甗出土状態 2. 坑・竈出土状態 3. 坏(須恵器)出土状態
- 第12図版 掘立柱建物址  
1. 全景 2. 近景(南より) 3. 近景(北より)
- 第13図版 掘立柱建物址  
1. 第1号掘立柱建物P-4土層断面(上)、柱痕確認状態(右)、2. 第1号掘立柱建物址 P-3土層断面(上)、柱痕確認状態(右)、
- 第14図版 掘立柱建物址  
1. 第1号掘立柱建物址P-5土層断面及び遺物出土状態 2. 第2号掘立柱建物址P-4土層断面(上)、柱痕確認状態(右)
- 第15図版 溝状遺構  
1. 全景 2. 近景(南より)
- 第16図版 溝状遺構  
1. 溝状遺構出土獸骨 2. 土城全景 3. 土城内出土縄文式土器
- 第17図版 特殊遺構  
1. 全景 2. 溝状遺構-3近景(東より) 3. 溝状遺構土層断面
- 第18図版 特殊遺構  
1. 縄文式土器出土状態 2. 石斧出土状態 3. 内耳出土状態
- 第19図版 グリッド  
1. C-4グリッド 2. H-5グリッド 3. C-6グリッド
- 第20図版 遺構全体  
1. 住居址及び掘立柱建物址全景(南より) 2. 住居址及び溝状遺構全景(東より)
- 第21図版 住居址内出土遺物  
1. 第1号住居址出土遺物 2. 第2号住居址出土遺物
- 第22図版 掘立柱建物址・溝状遺構及び特殊遺構出土遺物  
1. 掘立柱建物址出土遺物 2. 溝状遺構出土遺物 3. 特殊遺構出土遺物
- 第23図版 土城出土遺物
- 第24図版 土城出土遺物
- 第25図版 土城出土遺物及びその他の遺物  
1. 土城出土遺物 2. グリッド内出土遺物 3. 表採その他の遺物

## I 調査に至る経過

今回、発掘調査を実施した桑納前畑遺跡（陸小学校北方遺跡）は、千葉県八千代市桑納前畑170番地に所在する。

この周辺は畑と山林で、南側には市立陸小学校が隣接している。陸小学校は明治5年の学制施行によって、翌6年に創立され、明治45年からは現在と同じ場所に位置している。しかし、近年は住宅地として開発が進み、それに伴って児童数が増加し、教室の不足が大きな問題となった。この問題を解消するため、校舎の増築が計画され、市教育委員会財務課より埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあり、社会教育課で調査した結果、周知遺跡である陸小学校北方遺跡が存在しており、その旨を県文化課に連絡した。

その後、遺跡の取扱いについて、県文化課・市教育委員会社会教育課・同財務課の三者による事前協議を再三にわたって行い、校舎増築は必要であり場所の移転も不可能とのことで、記録保存もやむを得ないとの結論に達した。

県文化課の指導により、市教育委員会教育長を会長とする「陸小学校北方遺跡調査会」を組織し、事務局を社会教育課内に置いた。

調査期間は、当初20日間程度の予定であったが、気候の不順（長雨）のため、8月5日に調査が開始されて以来36日間を要して9月9日に終了した。

（事務局）

## II 調査組織

本調査にあたり、八千代市教育委員会において、教育長を中心として調査会が下記のとおり組織された。

### 陸小学校北方遺跡調査会

- |       |  |
|-------|--|
| 会 長   | 市川清一教育委員会教育長   |
| 事 務 局 | 清水盛人社会教育課長・佐々木優一係長・木原善和主事  |
| 調査主任  | 溝口勝美   |
| 調 査 員 | 柴本 郎・吉野俊忠・岸本雅人・出口智子・伊藤克己・荻野 進・根本貴由佳<br>平野雅之・寺内博之・遠藤 聡・吉川乃里子  |
| 調査補助員 | 中村秀也・立石昭彦・立石トミ・立石慶三・白井トキ・立石ふみ・鈴木きよ<br>高橋道子・吉川ます・立石 巖・黒沢光子・豊田須子・山崎敏子・佐藤秀樹<br>高橋幸恵・山口勝美・吉川礼子・畑山 実・立石久夫・鈴木秀太郎・立石み<br>ね子・吉川富美子・西山みどり |
| 協 力 者 | 牛房茂行・立原法久  |

### Ⅲ 位置と歴史的環境

本遺跡は、八千代市の市街地の北方、標高20m前後の台地上に所在し、印旛沼の湖尻で合流する新川を東に、神崎川を北に望む。これらの河川は、その流域に多くの樹枝状支谷を開析しており、台地上には多くの遺跡が所在している。本遺跡の所在する台地も同様である。

本遺跡は、桑納部落の北方に位置し、東に新川、北に小支谷を望む。従来、主に縄文式土器（前期と加曾利E期）を主体に土師器の分布と、一部に貝塚の所在が知られる。立地する台地は、縁辺が比較的高く、妙見神社周辺を最低として、窪地状になっている。今回の調査区域は、台地中央の妙見神社の南側にあたる。「全国遺跡地図-12、千葉県」（文化庁文化財保護部編集）には、6-257として記載されている。

周辺には、先土器時代から歴史時代までの遺跡が調査、または確認されている。

先土器時代の遺跡は、南南東2.5kmの村上込の内遺跡において、ナイフ形石器、ポイント、エンドスクレイパー等の出土が報じられている。

縄文時代の遺跡は、西方に支谷を隔てて埴久保遺跡（中期）、南方1kmの台地縁辺に桑橋遺跡、北東2.5kmに新川と神崎川を望む台地の先端には佐山貝塚（中期）がある。また、対岸には神野貝塚（中・後期）の、おおびた遺跡（早～中期）、村上遺跡群や菅地の台遺跡（前期）が開析支谷を望む台地の縁辺に点在している。

弥生時代の遺跡は、北関東系土器を伴う住居址が検出された南南西4kmの名主山遺跡、おおびた遺跡（後期）、その他台地縁辺にいくつかの遺跡が知られており、主に多くの遺跡で北関東系土器の出土が伝えられている。

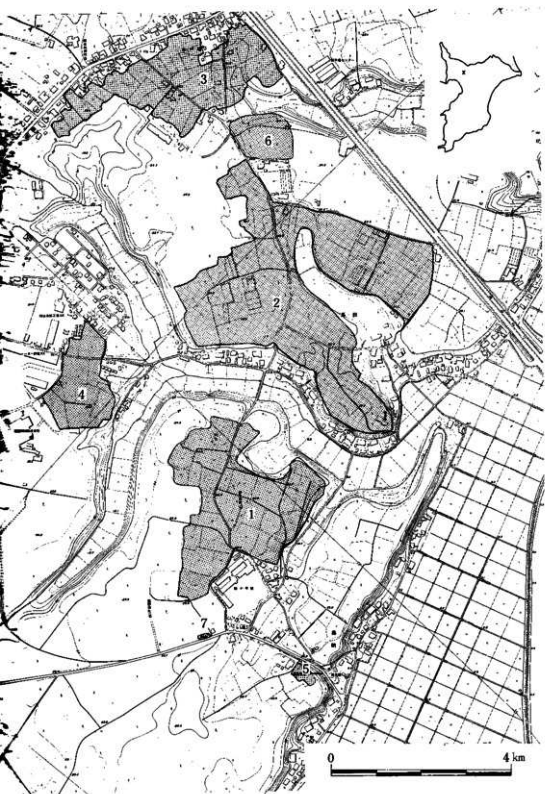
古墳時代の遺跡のうち古墳は、南方0.6kmに前方後円墳と円墳からなる桑納古墳、北東2kmの台地縁辺に平戸台古墳群が所在する。対岸には現在では消滅している保品栗谷古墳群や神野芝山古墳群等が、印旛沼に近い開析支谷を臨む台地の先端に点在している。土師器の包含地は、本遺跡の北に島田遺跡（前～後期）、木戸場遺跡、埴久保遺跡が周辺に所在する。また、周辺には五領式土器を伴う住居址が検出されたおおびた遺跡、佐山遺跡（前・中期）等が、台地縁辺に多く点在する。

歴史時代の遺跡は、村上遺跡群、おおびた遺跡等台地縁辺の他に、西方2.5kmの神野北兵塚遺跡や阿蘇中東側遺跡のように台地中央に所在する遺跡もみられる。

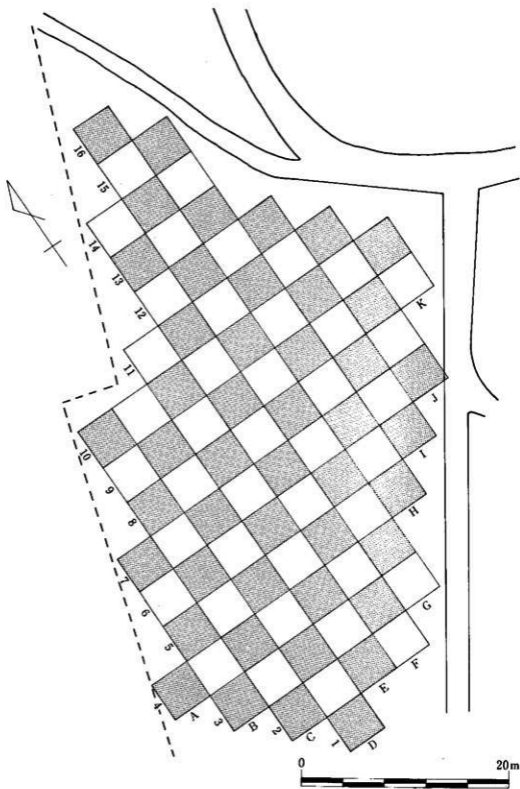
また、中・近世の遺跡としては、南東4kmに米本城址、南西4kmに吉橋城址、南方8.5kmには高津館址が台地縁辺に所在する。塚は、南側の熊野神社群集塚、北側の島田台塚の他に、村上第1・2塚群、神野群集塚、下高野庚申塚等、市内で15群116基が確認されている。（柴本）

周辺の遺跡 1. 桑納前畑遺跡 2. 島田遺跡（土師器） 3. 木戸場遺跡（土師器）  
4. 埴久保遺跡（縄文、土師器） 5. 巖島神社遺跡（土師器） 6. 島田台塚 7. 熊野神社群集塚 但し、5・6は新発見である。





第1図 位置及び周辺地形図



第2図 グリッド設定図

0m



第3圖 発掘区と遺跡周辺地形図

## Ⅳ 日 誌 抄

8月5日(金) 晴れ

発掘に先立って、八千代市教育委員会社会教育課木原主事と現地において、調査手順及び器材等の打合わせを行う。遺跡の除草を行う。遺跡を東西南北方向に4mのグリッドを設定する。また、グリッド設定に並行して遺跡の撮影を行う。

8月6日(土) 晴れ

グリッド設定と遺跡の全体測量を行う。

8月7日(日) 晴れ

グリッド設定を終了し、南西A-4グリッドより発掘を行う。畑の耕作によると思われる攪乱が著しい。

8月8日(月) 雨

降雨のため途中で作業を中止する。

8月9日(火) 晴れ

昨日に引き続いて、グリッドの発掘に取りかかる。並行して遺跡の周辺地形測量を行う。

8月10日(水) 晴れ

各グリッド内から、土師器等の破片を検出する。

8月11日(木) 雨

遺物整理を行う。

8月12日(金) 曇り時々雨

ほぼ半数のグリッドを完掘する。南側のグリッドは全体的に攪乱が著しい。北側は、保存状態が良好で、H-15からは縄文時代の土壇が確認される。G-16からは溝状遺構が確認され、F-13、G-14からは、柱穴と思われる円形の落ち込みが確認される。

8月13日(土) 曇り時々雨

昨日に引き続いてグリッドの発掘を行う。雨のため時々作業中断。

8月14日(日) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月15日(月) 雨

遺物及び図面の整理を行う。本遺跡周辺地域の分布調査を行うと共に、今までの結果をふまえて、今後の作業手順について打ち合わせを行う。

8月16日(火) 曇り時々雨

セクションラインの設定及び遺跡の全景を撮影する。

8月17日(水) 雨

遺物及び図面の整理を行う。八千代市役所会議室にて雨で遅れている作業の対策を協議する。

8月18日(木) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月19日(金) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月20日(土) 曇り時々雨

全グリッドを完掘する。

8月21日(日) 曇り時々雨

東西・南北の土層断面図の作成を行ったのち、グリッド以外の部分についても調査を行う。

J-9は攪乱が激しく、ガラスの破片等が多く認められる。

8月22日(月) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月23日(火) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月24日(水) 雨

遺物及び図面の整理を行う。

8月25日(木) 曇り時々雨

溝状遺構及び特殊遺構の調査を進める。

8月26日(金) 曇り時々雨

溝状遺構と重複して、住居址の落ち込みが認められる。その周辺の精査を行い、ほぼ方形を呈するプランを確認する。

8月27日(土) 曇りのち雨

第1号住居址は、溝状遺構によって中央部が切られており、カマドの一部も原形をとどめていない。

8月28日(日) 曇り

第2号住居址を精査する。保存状態は良好である。

8月29日(月) 曇り

ピット群の精査を始める。ピット群は有機的に関連性を持つことが認められる。

8月30日(火) 晴れ時々曇り

住居址と溝状遺構等の全体撮影を行う。また、H-15で確認された土坑の精査を行う。

8月31日(水) 晴れ時々曇り

遺構の撮影を行う。また、並行してピット群及び土坑の精査を行う。

9月1日(木) 晴れ

県文化財調査班の築地文化財主事が中間指導のため来跡する。ピット群及び土坑の実測を行う。

9月2日(金) 晴れ

遺構及び各グリッドの撮影を行う。各遺構の断面図を作成する。

9月3日(土) 晴れ

全面的な写真撮影を行う。ピット群は掘立柱建物址2軒分と確認される。

9月4日(日) 晴れ

住居址のカマドの精査を行う。

9月5日(月) 晴れ

第2号住居址の精査を終え、遺構の全体測量を実施する。

9月6日(火) 晴れ

掘立柱建物址の実測図を20分の1で作成し、発掘調査を終了する。PR用の写真撮影のため市広報課より来跡する。

9月7日(水) 晴れ

本遺跡周辺地域の分布調査を実施する。

9月8日(木) 雨

器材の返却及び整理を行う。

9月9日(金) 曇り

関係機関等に終了報告を行い、現地より撤収する。

発掘終了後、出土遺物、図面等整理作業を行う。整理作業は計画表に従い、各分組ごとに仕事を進めた。ほぼ下記の日程で行った。

10月 出土遺物の土器洗いをし、その個体数を把握する。

11月 注記・接着を行い、復元可能な個体は土器実測図として完成させる。

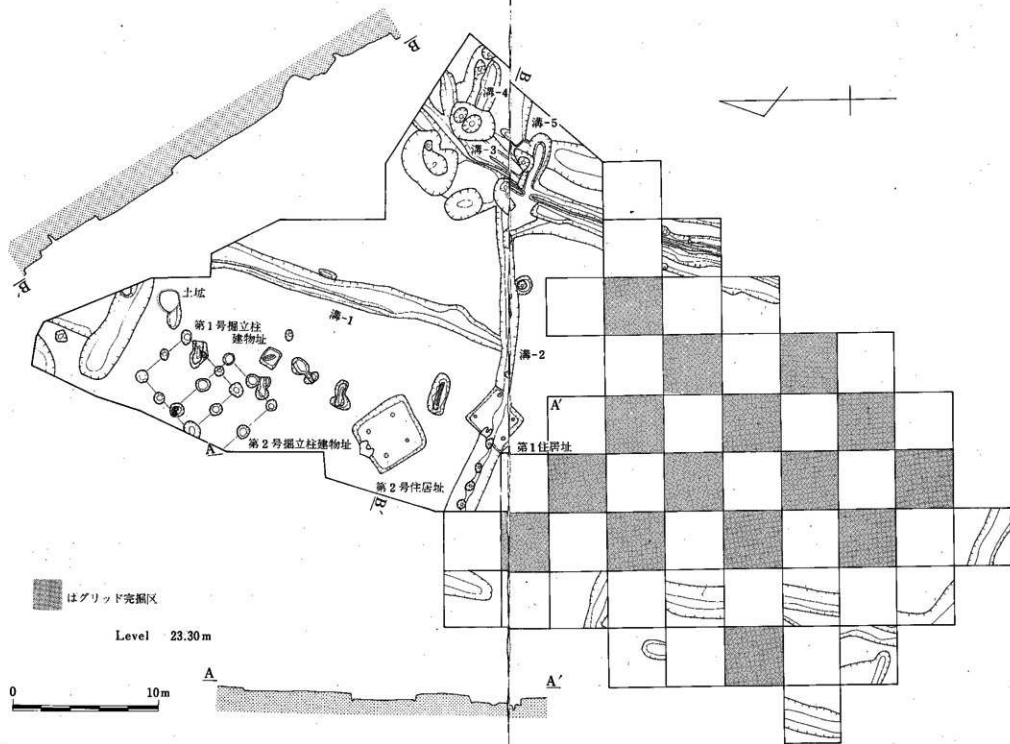
12月 出土遺物の拓本をとる。

1月 土器及び遺構実測図の整理とトレースを行う。並行して写真図版の編集を行う。

2月 報告書の執筆・編集を行う。

3月 報告書を刊行し、本調査全てを終了する。

(吉野)



第4図 遺構全体図

## V 遺構の概略

本遺跡の遺構は、主に北側で検出され、南側では溝状遺構の一部を確認するにとどまった。北側では、南側に続く溝状遺構と土壇を伴う特殊遺構が検出された。本調査区域の中央部西側より正方形プランを呈する住居址と、その北側に方形を呈する住居址が検出された。前者を第1号住居址、後者を第2号住居址とした。第1号住居址は、特殊遺構から延びた溝状遺構により、南北に切られている。第2号住居址は攪乱もなく、遺存状態が極めて良好である。この2軒の住居址の北側には有機的関連を持つピット群が検出され、北東方向に主軸を持つ第1号掘立柱建物址、北西方向に主軸を持つ第2号掘立柱建物址が検出された。また、この掘立柱建物址から約3mの位置に、径1.4mの円形を呈した、深さ0.9mの土壇を検出した。この土壇からは、多量の縄文式土器が出土した。そのほか、性格不明な土壇も検出された。全掘区のほぼ中央を幅1.5～2.0mで南北に走る溝状遺構と、その続きと思われる幅2.0～2.5mの東西に走る溝状遺構が検出された。

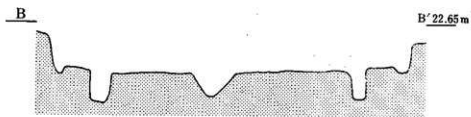
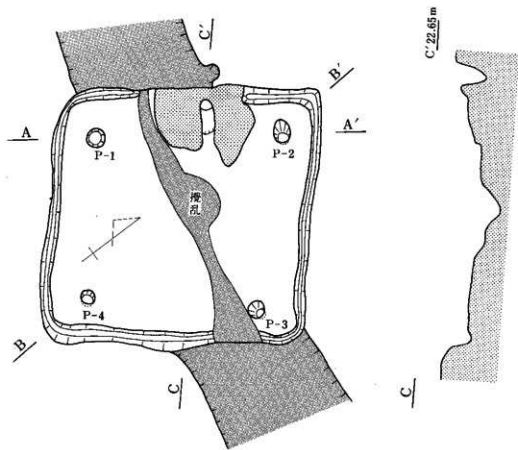
(岸 本)

## VI 住居址

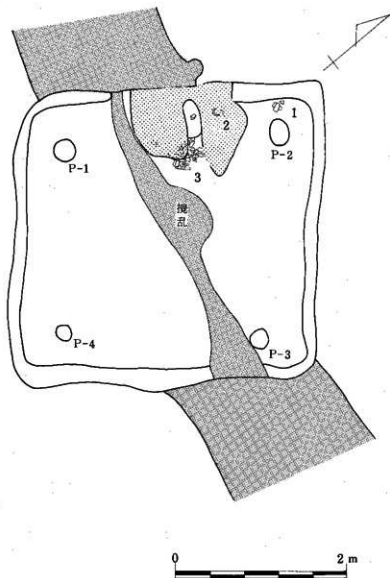
### 第1号住居址(第5図)

本調査区域の中央西側より位置する住居址である。主軸方位はN-52°-Wを示し、プランは1辺3.5mの正方形で、住居面積は12.7㎡である。中央の東側に位置する特殊遺構から延びた上端幅約2mの溝状遺構により、南北に貫通され、最大幅75cm、最小幅20cm、深さ30cm前後の攪乱をうけている。ローム地山の掘り込みは、もっとも浅い南壁中央で35cm、もっとも深い北東コーナーで50cmと壁高に多少差がある。壁高は南にくる程低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁の遺存状態は、溝で攪乱をうけた南北両壁を除いた東西両壁に限り良好である。周溝は、溝で攪乱をうけた部分を除いては、遺存状態は良好である。周溝は、幅8～15cm、深さ8～12cmで、壁に沿って回っている。住居址南側の周溝は北側に比べ浅い。柱穴は4本検出されており、住居址の四隅を結ぶ対角線上の周溝に近接した位置に、規則的に配置されており、ともに円筒状である。各柱穴間の1辺は、P-1～P-2・P-2～P-3はともに2.5m、P-3～P-4は2.3m、P-4～P-1は2.2mを測り、ほぼ等間隔を保っている。柱穴の規模は、P-1が径24cm、深さ25cm、P-2が径28cm、深さ45cm、P-3が径25cm、深さ47cm、P-4が径19cm、深さ40cmを測り、均一ではない。P-1は垂直に、P-3・P-4はやや内傾し、P-2は外傾して穿たれている。床面は、ローム中に構築されており、固くしまり、特に中央部からカマド前面においては堅固である。全体的にみて床面は多少の起伏はあるが、ほぼ水平である。





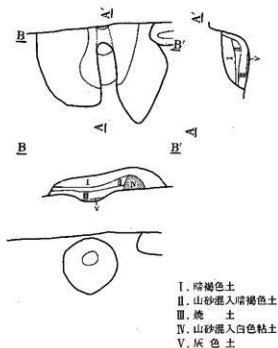
第5图 第1号住居址实测图



第6図 第1号住居址遺物出土状況

遺物出土状況 (第6図)

本住居址からは土師器が検出されたのみで、おもにカマド付近に集中して出土した。3個体の土器の出土が確認された。1は、カマドの右側から床面より数cm浮いた状態で出土した変形土器の破片である。2は、カマドの右袖からカマドにくい込む状態で、ほぼ完形を呈する状態で出土した埴形土器である。3は、カマドの焚き口付近から押し潰された状態で出土した変形土器で、本遺構中ではもっとも大きな群をなしている。



第7図 第1号住居址カマド実測図

cm程掘り込んでいる。袖部基底のハードルーム状の床面上に、山砂と白色粘土、ルーム土との混合土によって袖部が構築され、上部から天井部にかけては山砂を混入した暗褐色土が積まれている。カマド左側と中央部は完全に崩壊し暗褐色土と混合していた。本住居址のカマドの特徴は、壁への掘り込みがあまり見られず、小規模な造りである。また、カマドの右袖には塊が完形で出土し、突き口前面には壘が散在して出土した。

#### 遺物 (第9図)

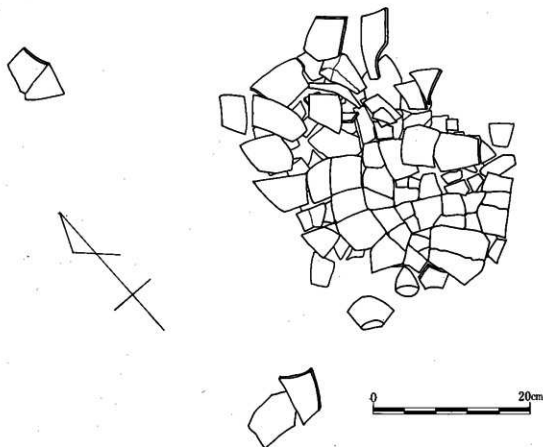
本住居址の出土遺物はすべてが土師器で、ほぼ復元できた土器は3個体である。1はカマドの右側から数cm浮いた状態で出土した土師器変形土器で、胴上半部から口縁までを有する。復元口径は18.7cm、最大径は胴部にあり19.7cmを測る。口縁は「く」の字状を呈していて、あまり肥厚せず、中位でやや内湾して尖り気味の口唇に至る。頸部から口縁内外面は軽い横撫だが、胴部内面は斜位に、外面は横位に、ともにヘラ削りが施されていて薄く均一な器厚に整えられている。ヘラ削りは、極めて精緻である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好でしまりが良い。2は、カマド

#### カマド (第7図)

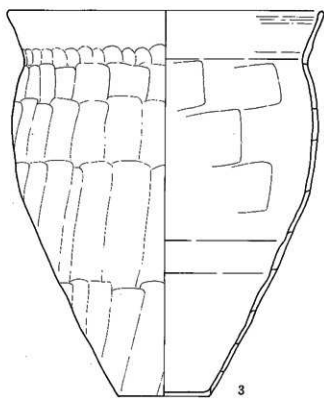
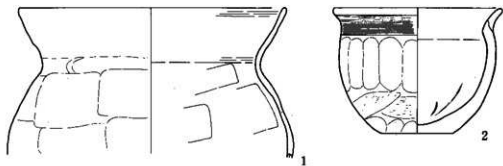
カマドは住居址北壁の中央に構築されている。左袖は住居址中央を切っている溝状遺構によって攪乱され遺存状態が悪い。カマド構築の砂質白色粘土は右袖に残るだけである。掛け口付近から煙道にかけて焼土の厚い堆積が認められ、燃焼部においては厚さ8cmを測る。

このカマドは規模としては小さく攪乱された部分を復元してみても推定幅120cm、長さ80cmである。燃焼部からは60°の急傾斜で煙道部につながっている。燃焼部には灰層が2cmの厚さで認められた。煙道はルーム面の確認状態で壁外にはあまり張り出しておらず、掛け口付近は60cm×50cmの円形に、ルームが焼けた赤化部分として把握された。掘り方は住居址の床を、深さ10

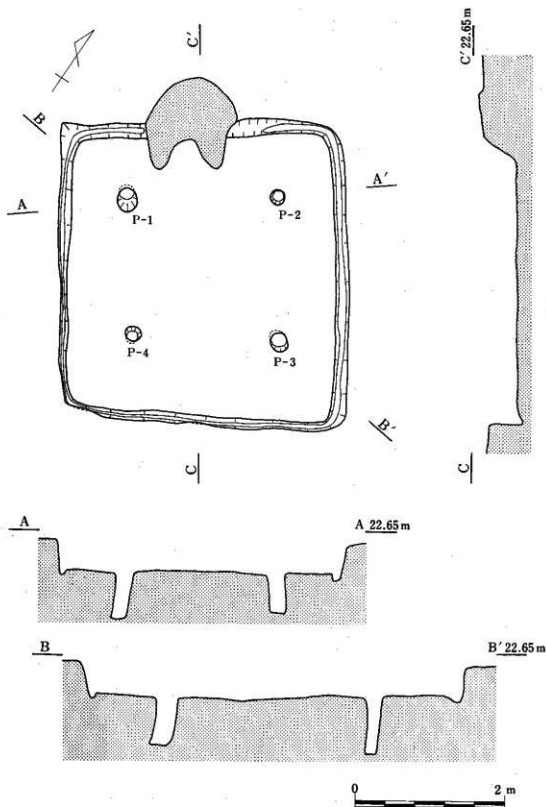
北側袖のほぼ中央から出土した土師器埴形土器である。口縁部3分の2を欠損しているだけでほぼ完形である。最大径は口縁部にあり、復元口径11.8cmを測り、器高は8.8cmの器内の厚い土器である。口縁は、厚い頸部から滑らかに短かく外反して尖り気味の口唇に至る。胴部は底部へ下るにつれて、やや器厚を増し、胴部最大径は胴上半部にあり径10.9cmである。整形は口縁と頸部内外面に横撫だが、胴部は外面上半部に縦位、下半部に斜位、底部近くは縦位によるヘラ削りが施され、胴部内面にヘラ撫でつけが行われている。色調は全体に灰褐色を呈し、焼成は良好である。3は、カマド前面で押し潰された状態で出土した土師器変形土器である。最大径は口縁部にあり、復元口径21.8cmを測る。胴部最大径は21.2cm、底径は6.2cm、器高は26.8cmを測る。器厚のきわめて薄い土器である。口縁は滑らかな「く」の字状を呈しゆるく外反している。胴部はやや肩を張り、底部に向ってゆるやかにすぼまる。底部は極めて薄い平底で、精巧なヘラ整形がなされている。成形は、明瞭な粘土紐の積み上げ方が認められ、口縁内外面に横撫だが頸部外面は細かな縦位のヘラ削りが施されている。また胴部内面は斜位及び横位方向に、外面は4段で縦位に規則的に、ともにヘラ削りが施されている。色調は灰褐色を呈し、焼成は極めて良好でしまりが良く、全体に軽い作りとなっている。



第8図 第1号住居址襲出土状態



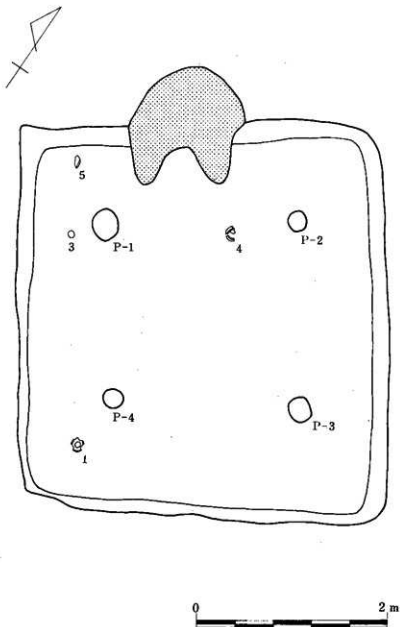
第9圖 第1号住居址出土遺物実測図



第10图 第2号住居址实测图

## 第2号住居址 (第10図)

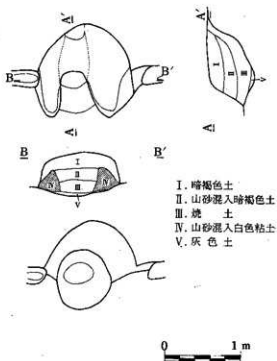
調査区域の北西側で、第1号住居址の北側に3.5m隔てて位置している。遺存状態は極めて良好で、主軸方位はN-37°-Wを示す。各辺は南北両側が3.6mと、共に等しく、西側は3.8m、東側は4.0mで、プランはほぼ台形を呈する。住居面積は14.1㎡で、第1号住居址と比べ大形である。ロー



第11図 第2号住居址遺物出土状況

ム地山の掘り込みは、もっとも浅い南壁中央が41cm、もっとも深い北西コーナーで48cmと壁高に大差はなく、ほとんど均一である。壁は各辺とも垂直に立ち上がる。周溝は壁下に幅9～20cm、深さ5～10cmで全周している。全体的に広いが柱穴P-4のコーナーでは狭くなっている。

周底は多少の凹凸がみられるが、遺存状態は良好である。柱穴は4本検出されている。各柱穴とも円筒状で、各柱穴間の1辺は約2mの等距離を測り、第1号住居址と比べ50～60cm短い。P-3を除いて、P-1・P-2・P-4は、住居址の四隅を結ぶ対角線上に位置するが、第1号住居址と比べ、多少住居の内側に位置している。柱穴の規模は、P-1が径24cm、深さ63cm、P-2が径18cm、深さ52cm、P-3が径25cm、深さ74cm、P-4が径23cm、深さ60cmを測り均一ではない。P-3はやや外傾し、P-1・P-2・P-4は内傾している。床面はハードルーム削平面をそのまま床とし、全体的によく踏み込まれていて固くしまっている。床面中央は多少窪んでいるが、全体的に水平である。



第12図 第2号住居址カマド実測図

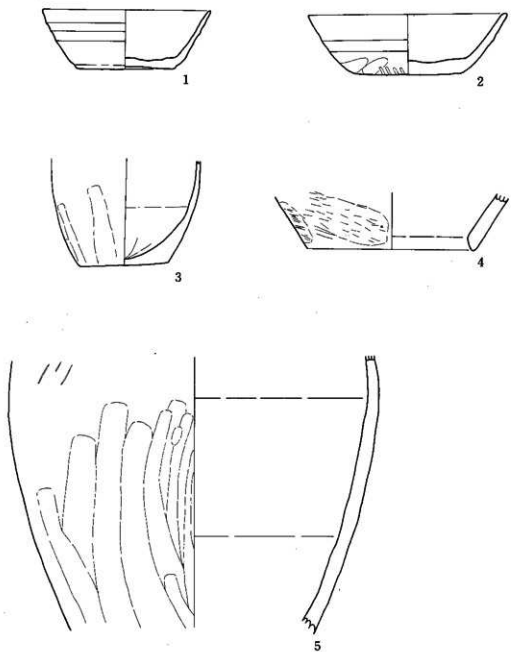
#### 遺物出土状況 (第11図)

本住居址の出土遺物は土師器と須恵器が検出された。床面上から4個体、ほかに覆土中から1個体の計5個体が、また、カマド内から土師器片が数片出土した。カマド内出土の土師器片以外は実測可能である。4個体が土師器で、1個体が須恵器である。1は、南西コーナーと柱穴P-4とのほぼ中央に位置した床面上に出土した。2は、覆土中から出土した。3は柱穴P-1の西側の床面上に、底部を上にした状態で出土した。4は、カマド右袖前面にくい込む状態で出土した。5は、北西コーナー付近の床面上に出土した。

#### カマド (第12図)

カマドは住居址北壁の中央に構築され、比較的遺存状態がよく、カマド袖右側の前面からは第13図-4が出土した。カマドは住居址床面を径80cmほどの円形に、深さ15cmほど掘り込み、火床としている。カマド構築材の砂質白色粘土は両袖において良好に残され、焚き口付近から掛け口、





第13図 第2号住居址出土遺物実測図

煙道にかけて焼土の厚い推積が認められる。焼土層は燃焼部において厚さ15~20cmを測り、燃焼部から約30°のゆるい傾斜で煙道部に向かって立ち上がる。燃焼部の底部は灰層が厚さ5cm程度認められた。カマド全体は壁から60cmほど奥へ掘り込まれ、床面を掘り込んだ掛け口付近は40cm×30cmの円形にロームが焼けた赤化部分として把握された。カマドの規模は比較的大きく、幅130cm、長さ120cm程度である。住居址のローム床面上には、山砂と白色粘土、ローム土との混合によって袖部が露かれ、天井部は前面が完全に崩壊して暗褐色土と混合していた。本住居址のカマドの特徴は、壁の掘り込みにあり、三角形に約60cm張り出した掘り込みの中央に幅30cmの煙道部の窪みがみられる。

### 遺 物 (第13図)

本住居址の出土遺物は、4個体の土師器と1個体の須恵器の計5個体が確認され、ともに実測可能で、カマド内から出土した数片の土師器以外は実測可能である。1は、口縁を上にした状態で床面上から出土した須恵器杯形土器である。口縁部は5分の4を欠損している。器形は復元口径11.7cm、器高4.1cm、底部径は6.7cmを測る。底部は轆轤を使用した回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削りで全面調整している。体部は下端に、切りはなし後に行われたヘラ削りが、0.7~1.0cmの幅で明瞭に認められる。底部から直線的に立ち上がり、体部上半部には整形時の3段の稜を有する。器厚は口縁に近づくにつれ薄くなり、口縁端では丸くおさめられている。体部内面における押しえつけは強いが、底部内面では凹凸が認められ、底部中央で径3cm前後の円形の隆起がある。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。2は、土師器杯形土器である。3分の1は欠損している。轆轤を使用して整形されており、全体的に整っている。器形は口径13.8cm、器高4.2cm、底径7.5cmを測る。底部は、手持ちヘラ削りが全面に施されているため、切り離し技法は不明である。底部周縁部も手持ちヘラ削りが施され、体部下端にも手持ちヘラ削りが及ぶ。体部は底部から曲線的に立ち上がり、上半部には整形時の稜を有する。器厚は全体的に厚く、0.5~1.0cmを測り、口縁端では丸くおさめている。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。3は、底部を上にした状態で出土した土師器鉢形土器で、胴上半部から口縁にかけて欠損している。現存器高7.3cm、底径6cmを測る。底部は全面ヘラ削りが顕著に認められる。体部は底部から湾曲気味に立ち上がり、体部内外面は手づくね手法が施された後、ヘラ削りで整形してある。底部内面は明瞭にヘラ削り痕を有している。体部下半に2箇所輪積み痕が認められる。器厚は全体的に厚く、0.4~1.0cmを測り均一でない。色調は全体的に赤褐色を呈しているが、外面は火をうけて煤が付着しており、黒色を呈している。焼成は良好である。4は、土師器甕形土器の底部である。胎土には大粒の砂粒を混入していて、外面にはヘラ削りの際に生じた斜行する砂粒の流れが多く認められる。ヘラ削りが丹念に施され、整形は極めて良好である。器厚は1.1cmでほとんど均一である。底部周縁はヘラ削り手法が明瞭に認められ、内側へ鋭角的にヘラ削りが施され、0.7~1.0cmの幅を有する。色調は全体的に灰褐色を呈しているが、底部外面下端を除いて火をうけた煤が付着して黒色を呈している。焼成は極めて良好である。5は、土師器甕形土器の胴部である。外面は上から下への、幅1.0~2.5

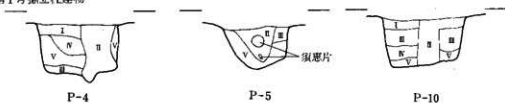
cmのヘラ削り痕が、内面には2個所の輪積み痕が、明瞭に認められる。器厚は全体的に厚く、0.8～1.0cmを測る。色調は黒褐色を呈していて、焼成は良好である。 (岸本)

## Ⅶ 掘立柱建物址

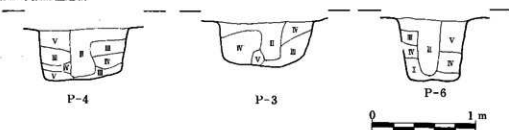
### 第1号掘立柱建物址 (第14図・第15図・第1表)

本址は、遺跡発掘区の北側に位置し、グリッドF-13、G-14において確認された遺構である。2軒の竪穴住居址とは、約8m隔てて北に存在し、第2号掘立柱建物址とは切り合った状態で確認された。構造は、3間×2間の10本柱を持つ長方形の掘立柱建物址として構成され、主軸方位はN-45°-Eである。規模は、桁行が5.2m、梁行が4.2mを測り、柱穴群内の総面積は21.84㎡を測る。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈し、径は各コーナーが約90cmと大きいのが、中間に位置する柱穴の径は約60cmを測る。深さにおいても、各コーナーの柱穴は深く、ていねいに掘られている。柱間寸法は、桁行が約1.7m、梁行が2.1mを測る。桁行は、P-2、P-3、P-7、P-8の柱穴位置に不規則性が認められる。P-4、P-10の土層断面には、柱痕跡が明瞭に観察され、径20cm内外の黒褐色土として確認された。また、柱痕跡の周囲には、掘り方埋土としてローム粒子混入褐色土と、ローム粒子混入黒褐色土が互層をなしている。P-1、P-2は、第2号掘立柱建物址と共通して使用されている。P-2では、柱穴底部に第1号掘立柱建物址の柱痕と、第2号掘立柱建物址の柱痕が確認され、埋土中から須恵器口縁部片の出土をみた。また、P-5の柱痕跡黒褐色土中からは、須恵器底部が出土した。

#### 第1号掘立柱建物



#### 第2号掘立柱建物



I. 褐色土 II. 黒褐色土 III. ローム粒子混入茶褐色土 IV. ローム粒子混入褐色土  
V. ローム粒子混入黒褐色土

第14図 掘立柱建物址土層断面図

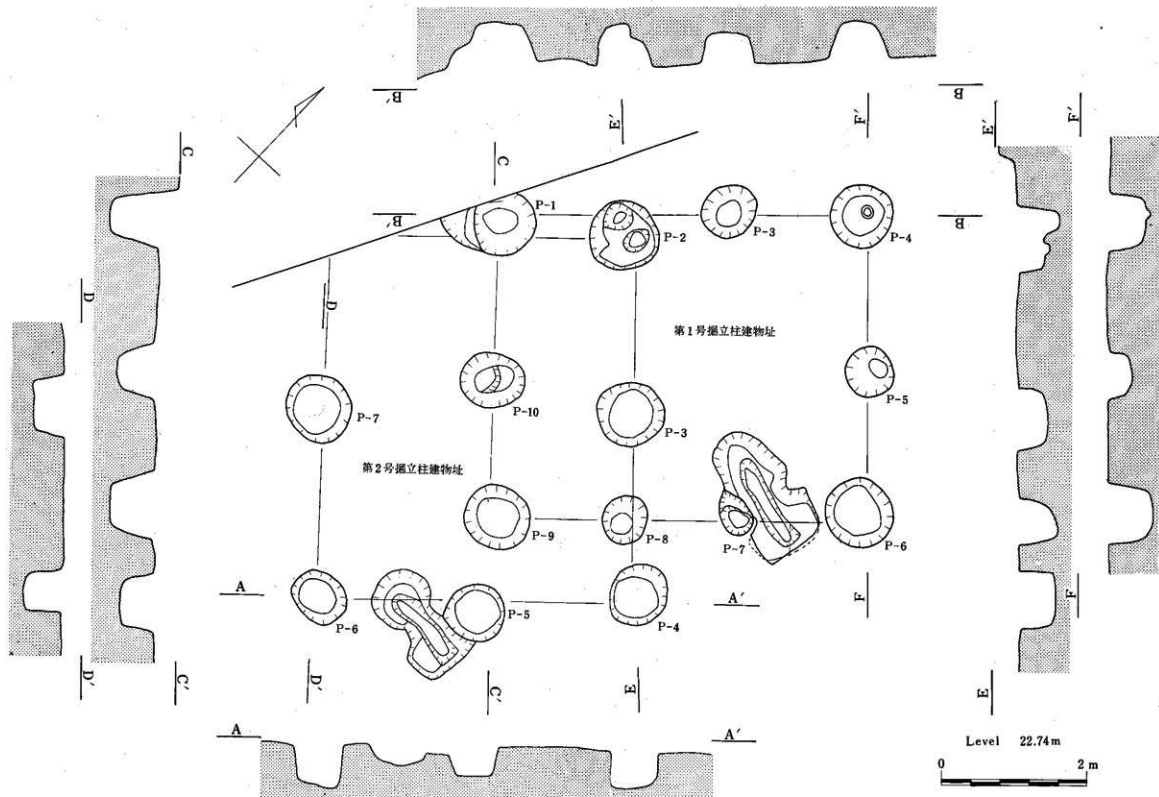
第2号掘立柱建物址 (第14図・第15図・第1表)

本址は、第1号掘立柱建物址と同じく遺跡発掘区北側に位置し、第1号掘立柱建物址とは、中心部において3m程南西側にずれている。西端部は、発掘区域外のため確認することができなかった。建物の構造は、3間×2間の8本柱を持つ掘立柱建物として構成され、主軸方位はN-45°-Wであり、第1号掘立柱建物址の棟方向とは90°異なる。規模は、桁行が5.2m、梁行が4.2mを測り、柱穴群内の総面積は21.84㎡を測る。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈し、径は約80cm内外、深さは約50cmを測り、すべて同一規模の柱穴である。柱間寸法も桁行が2.6m、梁行が2.1mと規則性を持つ。P-3、P-4、P-6の断面には、特徴的な柱痕跡が明瞭に認められ、柱痕径は約20cmの黒褐色土として確認された。掘り方埋土は、ローム粒子混入褐色土と、ローム粒子混入黒褐色土が互層をなしている。P-7の埋土中からは、須恵器胴部片が出土した。掘立柱建物址は、その痕跡を掘り方に残すのみであり、遺物の出土も少なく、柱痕跡及び、埋土中に数片出土をみただけである。第1号掘立柱建物址のP-7北側と、第2号掘立柱建物址のP-5南側に付随する掘り込みは、同様の形をなし、東西方向にのびており、掘立柱建物址南東部の似た位置に存在する。P-7に付随する掘り込みからは、土師器片、須恵器片が数片出土している。

	Pit, No	長 径	短 径	深 さ	柱 痕 径	備 考
第1号掘立柱建物址	P-1	95	85	50	—	埋土中から遺物出土。 柱穴底部に柱痕がある。
	P-2	98	95	55	20	
	P-3	75	70	40	24	柱痕跡から遺物出土。 埋土が横位に層をなす。 小規模柱穴。
	P-4	88	86	57	23	
	P-5	68	65	34	20	
	P-6	95	90	62	—	
	P-7	47	34	30	—	
	P-8	61	59	54	—	
	P-9	93	86	62	—	
	P-10	88	75	53	20	
第2号掘立柱建物址	P-1	95	85	50	—	埋土中から遺物出土。 底部に柱痕が見られる。
	P-2	98	95	45	20	
	P-3	94	90	42	20	底部に柱痕が見られる。
	P-4	90	80	50	20	
	P-5	81	80	42	—	
	P-6	78	65	60	22	
	P-7	95	87	42	—	

第1表 第1・2号掘立柱建物址柱穴表

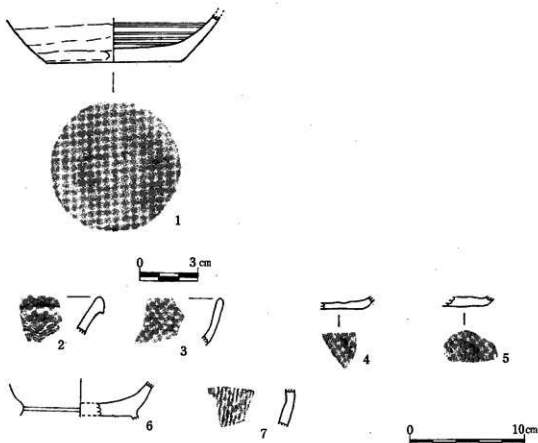
(単位cm)



第15图 掘立柱建物址实测图

出土遺物 (第16図 1～7)

1は、土師器杯形土器の底部である。第1号掘立柱建物のP-5柱痕跡黒褐色土中から出土した。底部は右回転ヘラ切り整形によって轆轤から切り離したのち、底部全体がていねいなヘラ削りによって再調整され、底部周縁は手持ちヘラ削りによって余分な器肉を削っている。胎土には細かな砂粒を混入し、色調は茶褐色を呈する。2は、須恵器口縁部片である。P-1から出土した。口唇部は、折り曲げられて稜を作り、口縁下部には櫛描き波状文が施されている。胎土は、よく精選されており、若干の砂粒を含む。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。3・4・5・6は、第1号掘立柱建物址P-7の北側に付随する掘り込み内より出土したものである。3は、土師器口縁部片で、色調は茶褐色を呈する。4は、土師器底部片で、回転糸切り痕が見られる。色調は茶褐色を呈し、焼成は不良である。5は、土師器底部片で回転糸切り手法による整形痕が見られ、色調は茶褐色を呈する。6は、須恵器底部片で、高台付土器である。底部の器肉は厚く、1cm程度である。色調は暗灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。7は、第2掘立柱建物址P-7の埋土中から出土した須恵器胴部片である。表面には平行たき日文が施されている。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。 (吉野)



第16図 掘立柱建物址出土遺物実測図

## Ⅷ 土 塚 (第17図)

本遺跡の北側に位置し、H-15グリッド内に円形の落ち込みとして確認された。平面形はほぼ円形を呈しており、口径1.4m、深さ0.9mを測る。

壁の状態は良好で、しっかりとしている。土層は、上層に若干の黒色土、ローム、炭化物混入茶褐色土が堆積し、下層に行くに従って、全体的にローム粒子混入の割合が高くなっている。本遺構は、他のピット群が独立柱建物の柱穴址であると思われるのに対して、他のピット群よりも口径が大きく、北側に単独で存在した。底部は上面よりも広がり、袋状を呈し、底は平坦であり、径1.58mである。遺物は、多くが上層より出土し、多数の縄文式土器片、4個の土鏃が出土している。

### 出 土 遺 物

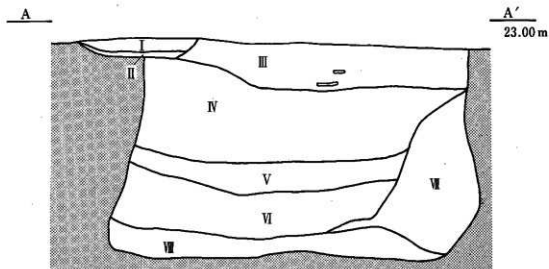
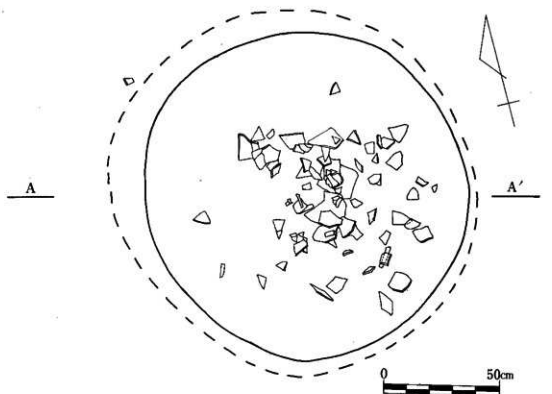
#### 縄文式土器

##### 第1群土器 (第18図 1～6)

口縁部下に、1条の微隆起線をめぐらし、以下、地文に縄文が施文されているものである。口縁部は無文帯となっている。1・3は、微隆起線以下、全体に斜行縄文が施文されている。3は、縄文の目が細かい。2は、窓枠状の微隆起線によって区画され、その内側に縄文が施文されており、外側は、縄文を磨消している。4は、微隆起線によって縄文の部分と磨消し縄文の部分とを区画している。5は、地文の縄文が微隆起線によって区画されており、微隆起線がT字状を呈している。6は、地文の縄文が口縁部下の微隆起線から垂下した沈線によって区画されている。また、口縁部には、耳状を呈すると思われる把手を持つ。いずれも口縁部破片であり、強く内湾し、キャリパー状の深鉢形土器であると考えられる。縄文の方向はどれも一定した方向をとっていない。色調は、1～4は茶褐色、5は暗褐色、6は黒褐色を呈する。また、2・3は砂粒を混入している。焼成は、どれも良好である。

##### 第2群土器 (第18図 7～12)

口縁部破片であり、口縁部下に1条の沈線をめぐらし、以下、地文に縄文が施文されているものである。7・8・11は、口縁部が無文帯となっており、沈線以下に、斜行縄文が施文されている。9は、口縁部は無文帯で、三角形状を呈する沈線によって区画され、沈線の内側は、縄文が磨消されている。10は、口縁に斜行縄文をめぐらし、沈線以下は、楕円形状を呈すると思われる沈線によって区画され、沈線の内側に縄文が施文され、外側は、縄文が磨消されている。12は、口縁部に2条の竹管による列点が細かい間隔で連続して付された刺突文がある。また、沈線以下は、斜行縄文が施文されている。色調は、7～11は茶褐色、12は暗褐色を呈している。焼成は、いずれも良好である。



I. 黒色土 II. ローム混入黒色土 III. 炭化物混入茶褐色土 IV. 暗褐色土  
 V. ローム粒子混入明褐色土 VI. 黒褐色土 VII. 茶褐色土 VIII. ローム混入茶褐色土

第17図 土坑遺物出土状況及び断面図



### 第3群土器 (第18図 13~15)

口縁部破片であり、13・14は、口縁部が無文帯で、以下に縄文が施文されているものであり、15は、口縁部から胴部にかけて斜行縄文が施文されているものである。また、13は、3本の沈線が並行して走っている。2本は間おらずに走り、他の1本との間は無文帯となっている。この3本の沈線の外側に縄文が施文されている。色調は、13が黄褐色、14が黒褐色、15が茶褐色を呈している。また、15は胎土に若干の砂粒を混入し、色調はどれも良好である。

### 第4群土器 (第18図 16・17 第19図 18~20)

胴部破片であり、微隆起線によって縄文の部分と磨消し縄文の部分とを区画しているものである。16・18・19は、微隆起線がゆるやかなカーブを描いている。しかし、どれもほんの一部分であり、どのような文様を構成するのかわからない。また全体的に、縄文の方向が一定していない。色調は、16が黄褐色、17が黒褐色、18~20は茶褐色を呈する。どれも胎土には砂粒を混入し、焼成は良好である。

### 第5群土器 (第19図 21~23)

胴部破片であり、沈線によって縄文の部分と磨消し縄文の部分とを区画しているものである。21・22は、沈線が楕円形状を描いており、その内側に縄文が施文されている。色調は、21は暗褐色、22は黒褐色、23は黄褐色を呈し、焼成は、21は良好、22・23は悪く、もろくて崩れやすい。

### 第6群土器 (第19図 24・25)

胴部破片であり、縦に並行に走る2本の微隆起線によって地文の縄文を区画しているものである。色調は24が茶褐色、25が黄褐色を呈し、焼成が悪く、もろくて崩れやすい。

### 第7群土器 (第19図 26)

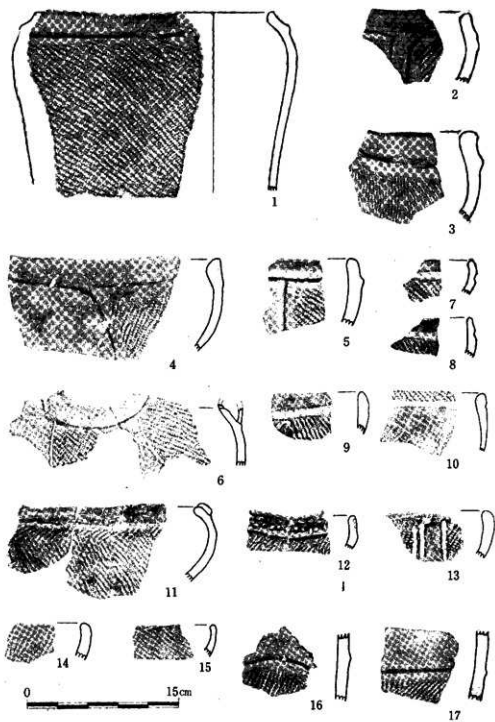
口縁部破片で、口縁部下の高さ1cmほどの隆起線により口縁部の無文帯と地文の縄文とを区画している。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を混入し、焼成が悪く、もろくて崩れやすい。風化がはげしく、口縁部上端が崩れている。

### 第8群土器 (第19図 27)

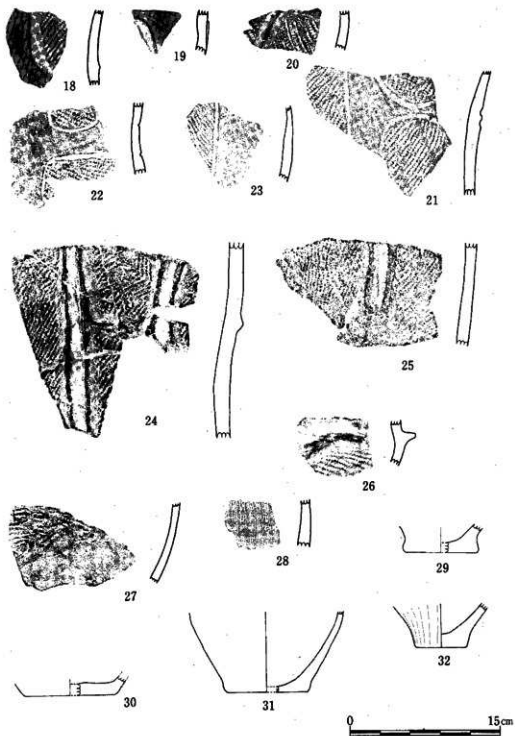
胴部破片であり、上方に若干の縄文がみられ、下方は縄文が磨消されている。色調は黒褐色を呈し、焼成がわるく、風化がはげしい。

### 第9群土器 (第19図 28)

胴部破片であり、刷毛目ないし櫛目状の工具による擦痕で飾られたものであり、擦痕は直線的である。色調は、灰褐色を呈し、焼成は良好である。

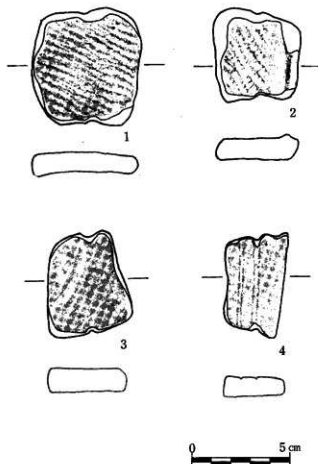


第18图 土坑出土遗物拓影图



第19図 土坑出土遺物実測図及び拓影図

土器底部 (第19図29-32)



第20図 土坑出土土鍾実測図

	長径	短径	厚さ	重量	土器型式	備考
1	6.0cm	5.5cm	1.0cm	47.8g	加曾利E木葉	胴部片
2	4.6◇	4.4cm	1.0◇	30.0◇	加曾利F木葉	口縁部片
3	5.2◇	4.0◇	1.1◇	37.0◇	加曾利E木葉	胴部片
4	5.0◇	2.9◇	1.0◇	20.5◇	加曾利F木葉	胴部片

第2表 土鍾計測値表

土鍾は4個出土しており、いずれも土器片を加工して土鍾としたものである。2がほぼ正方形に近い形をしているほかは、3片とも長方形状を呈する。4片とも短辺のほぼ中央に切り込みを入れている。また、2は口縁部片であるが、ほかは胴部片を用いたものである。1は、斜行縄文をもつ土器の胴部片、2は、口縁部に1本の沈線めぐらし、以下の部分に斜行縄文を施す土器の口縁部片、3は、沈線文をもち、磨消しの痕のある土器の胴部片、4は、並行した2本の沈線文をもつ土器の胴部片である。4片とも茶褐色を呈し、器厚は、ほぼ1cmほどである。また、焼成も良好である。(出 口)

平底の底部破片であり、器形は深鉢形土器であると考えられる。29は、胴部から一旦内曲して底部にいたる。底径は7.1cmを測る。内側はほとんど平底を呈しておらず、丸底に近い形になっている。30は、底径9.0cmを測り、内側に輪積み痕を残し、胎土に砂粒を混入している。31は、胴部下端から底部にかけての破片であり、胴部に若干の縄文がみられ、底部にいたるにつれ磨消されている。底部は底径8.0cmを測り、内側は丸底に近い形になっている。32は、底部は胴部よりも器厚が厚くなり、胴部が0.8cmであるのに対して底部は1.4cmほどにもなる。胴部には縦方向のヘラ削り痕がみられる。

土 鍾 (第20図1~4 第2表)

土鍾は4個出土しており、いずれも土器片を加工して土鍾としたものである。2がほぼ正方形に近い形をしているほかは、3片とも長方形状を呈する。4片とも短辺のほぼ中央に切り込みを入れている。また、2は口

## IX 特殊遺構 (第4図)

調査対象地域北側の全面発掘を行った地域より、溝状遺構5址、土坑19基が確認された。

溝-1は、溝-2と直角に第1号住居址東側で接し北方へのびる。幅は、上端1.5m前後、深さ0.5m前後である。立ち上がりは、緩やかであり、西側では一部階段状を呈する。

溝-2は、緩やかに湾曲しながら、東西方向にのび、第1号住居址の中央を貫通し、溝-3とほぼ直角に交わる。幅は上端2m前後、深さ0.4mを測り、立ち上がりは緩やかである。

溝-3は、土坑による擾乱のため、保存状態は不良である。溝-2と交叉しており、南南西に走る。幅は上端1.7m前後、深さ0.5m前後を測り、北側では次第に浅くなる。

溝-4・5は、溝-3とほぼ直角に交わり、東へのび、約3mの長さを有する。東端は丸味を持ち、幅は上端1.1m前後で、深さは0.2m前後である。立ち上がりはやや急で、一部階段状を呈する。

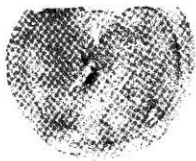
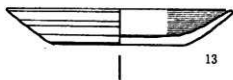
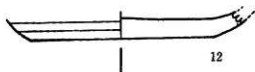
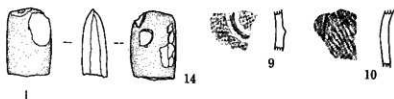
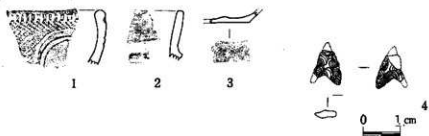
土坑は、溝状遺構内、またはそのはしに位置している。溝-3の周囲は、比較的規模の大きな土坑4基があり、いずれもその底に、小規模な落ち込み等を有する。緩やかな立ち上がりで、すり鉢状を呈する。溝-2の溝底には、10基の小土坑がほぼ同間隔で存在しているが、いずれも深さ0.2m前後である。

出土遺物は、溝-1の底面より動物骨、石鏃、溝-3の覆土中より縄文式土器片、磨製石斧等の他に、溝-5の覆土からは、明治時代以降のガラス製品やその破片が出土している。

### 出土遺物 (第21図)

1~4は溝1・2より、5~13は溝3~5及び土坑より出土したものである。

1は、口縁部破片で沈線が一条めぐり、その上から刺突文が施されている。その下は、羽状縄文を施し、二条の弧状の沈線により無文帯と区画される。胎土には、山砂りを含み、焼成は良好である。2も口縁部破片で無文の口縁部が2条の幅の異なる浅い沈線により区画される。胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。3は、土師器の杯の底部である。底部に糸切り痕が認められる。小片のため、底部径は不明である。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。4は、先端部と片脚を欠く、無茎の石鏃である。石質は、黒曜石である。5は、口縁部破片で口唇部直下に一条の微隆起帯を有し、下半には斜縄文が施されている。6は、胴部破片で、微隆起帯と斜縄文の組合わせからなる。7は、口縁部破片で沈線により、無文帯と斜縄文に分けられている。また、沈線中に穿孔も認められる。胎土は砂粒子を多く含み焼成も良好である。8・9ともに胴部破片で弧条の微隆起帯により縄文帯と区画されている。焼成はともに良好である。10も胴部破片で縦方向に延びる微隆起帯により、無文帯と斜縄文に区画される。胎土に小砂利を多く含む。焼成は良好である。11は、内耳付土器の破片である。口縁径33.8cm、底部径27.6cm、高さ4.9cmを測る。粘土ヒモを一本貼りつけて内耳をつくり、轆轤整形を行っている。焼成は良好である。12は、須恵器の環の底部破片である。底部径7.6cmを測り、底部にはわずかに糸切り痕が認められる。色調は、灰青色を呈する。13は、土師器の環で、口径9.6cm、底部径5.6cm、高さ1.5cmを測る。



第21図 特殊遺構出土遺物実測図及び拓影図

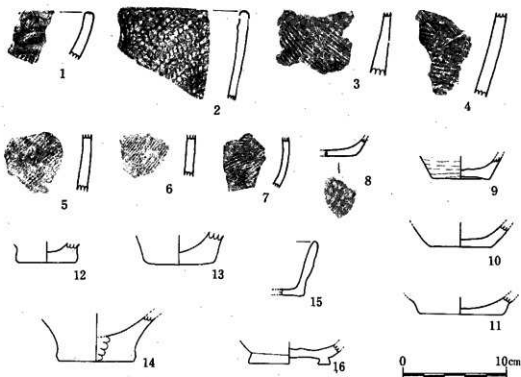
底部には、糸切り痕が認められる。色調は、明褐色を呈し、焼成も良好である。14は、両刃の磨製石斧で、頭部には打撃痕が認められる。石材は、安山岩と思われる。 (柴本)

## X グリッド (第4図・第22図)

調査対象地域の南側は、耕作による擾乱が著しく、ローム層まで達している。11グリッドから溝状遺構が確認された。その他のグリッドからは、遺構と思われるものは検出されなかった。東側H-5、I-6の遺構は、溝-3に続くと考えられる。西側C-2、C-4、C-6、C-8、C-10、D-1の遺構は、いずれも上端幅約2m、深さ40~60cmを測る。

出土遺物は、いずれも覆土中よりの出土である。

1・2は、縄文式土器の口縁部破片である。前者は、口唇部直下はよく研磨された無文帯で、それ以下は縄文が施されている。後者は、口唇部直下より、粒の大きい斜縄文が施されている。また口縁部内側は一条の沈線が施されている。3~7は、須恵器片でいずれも外面に甲き目文様がみられる。7は、自然釉の付着が認められる。焼成・胎七とも良好である。8~14は、土師器の底部破片である。8は、底部に糸切り痕が認められる。9は、底部径5.4cmを測り、外面には轆轤による整形痕が認められる。10は底部径5.8cmを測り、内面には整形痕が認められる。11は、底部径8cmを測る。器面が、磨耗しているため整形痕は不明である。12は、底部径5.4cmを測る。整形



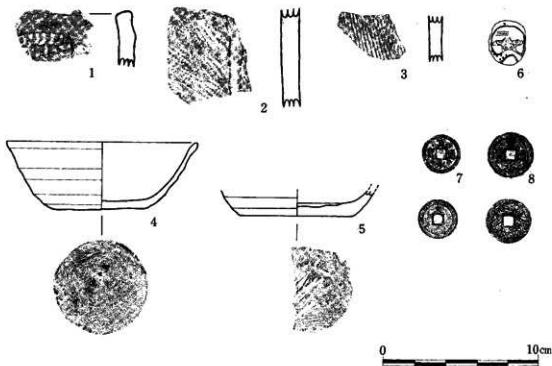
第22図 グリッド内出土遺物実測図及び拓影図

痕は不明である。13は、底部径7cmを測る。14は、底部径7.4cmを測る。8は環の、9~14は壺または甕の底部と考えられ、いずれも、胎土、焼成とも良好である。15・16は、須恵器で、前者は、環の破片で、器高は10.5cmを測る。体部は、やや厚く作られ底部からほぼ直立する。胴部には、轆轤使用痕が認められる。後者は、高台付底部の土器である。高台は、厚く端部においてやや厚みを増し、色調は暗灰色を呈する。両者とも胎土に砂粒を含み、焼成も良好である。(柴本)

## XI 表採・その他の遺物 (第23図)

1・2は、縄文式土器の破片である。前者は、口縁部破片で、無文部の下に連続瓜文が施されている。後者は、縦方向の沈線と斜縄文を施されている。ともに、焼成は良好である。3は、須恵器の破片である。外面に平行叩き目文様が施されている。4は、本遺跡の北方約100mの畑の耕作中に出土したものである。口縁径12cm、底部径3.1cm、器高4.3cmを測る。外面には、轆轤整形痕が、下端にはヘラ削り痕が認められる。底部には、糸切り痕がある。色調は、外面は褐色を呈し、内面は黒褐色を呈する。胎土は、小量の小石を含むがよく精選されており、焼成も良好である。5は、土師器の底部で、糸切り痕が認められる。6は、近世において使用された土面である。焼成は良好であり、表面はほとんど磨滅していない。7・8は寛永通宝である。表面はやや磨滅している。

(柴本)



第23図 表採・その他の出土遺物実測図及び拓影図



## XII ま と め

本調査にとりかかると同時に、調査対象地域の全体にわたり表面採集を実施した。その時点においては、かなりの遺物が採集されており、多くの遺構の検出が予想されていた。しかし、その結果は、前述したように縄文式土器を伴出する土塚1基、土師器・須恵器を伴出する住居址2址、土師器を伴出する掘立柱建物址2址、縄文式土器からガラスビン等を伴出する溝状遺構、縄文式土器から廃棄物を伴出する特殊遺構が検出されたのみにとどまった。ここに、桑納前畑遺跡の若干のまとめと考察を述べてみたい。

本遺跡の縄文時代に属する遺構は土塚のみで、ほかには全く確認できない。この遺跡が包括される陸小学校北方遺跡には、地点貝塚も認められ、その地域との関連遺構であろう。この土塚は、やや袋状を呈し、炭化物が含まれ、縄文時代中期に属するなど、従来から「小竪穴」と呼ばれていた遺構に類似点が認められる。また、本址出土土器を含む本遺跡出土の全ての縄文式土器は、その文様形態が似ている。口縁部の特徴は無文帯と微隆起帯、磨消し縄文帯を基調とする土器が多く、東京都「大蔵遺跡」、神奈川県「吉井第1貝塚」、茨城県「岩坪貝塚」出土土器などに共通する文様形態が認められる。県内の報告例としては、千葉市「中野僧御堂」、松戸市「金桶台遺跡」などがある。そのほか、4個の土錘については、この周辺地域の縄文時代中期の生産様式を知る遺物として貴重な資料である。

歴史時代の遺構としては、2軒の住居址と2軒の掘立柱建物址が検出されている。住居址は、共に主軸を北西方向にもち、北カマドを有し、4本の柱穴が配された方形プランを呈し、その規模・方向・構築方法に同一性が認められる。第1号住居址出土の土器には、須恵器を全く含まず、真間期末葉に比定されると考えられる土師器が数点検出された。第2号住居址からは、国分期前葉の特徴を有する須恵器の坏などが出土している。この二軒の住居址は、出土した遺物から第1号住居址が先に構築され、その後第2住居址が構築されたと考えられる。従来、掘立柱建物址は、規模・形態において多様性をもつと考えられ、住居、倉庫、納屋、作業所などに分類されている。本址は、一部調査対象外の地域にまたがっていたため、完全にその姿を把握できなかったが、共に三間×二間で、平均構築面積22.00㎡を有する。第1号掘立柱建物址と第2号掘立柱建物址の新旧関係は、両址に共通するP-1、P-2の掘り方・埋土の状態や、出土遺物等から、第2号掘立柱建物址が後で構築されたと考えられる。また、構築面積はほぼ同じであるのに対し、10本柱建築から8本柱建築へと構造上の変化も認められる。第1号掘立柱建物址においては、各コーナーの柱穴規模が大きく中間の柱穴規模は小さい。柱穴の位置も統一性がない。それに対して第2号掘立柱建物址では、同一規模の柱穴が画一的に規則正しく設けられている。第1号掘立柱建物址P-5柱痕跡から出土した土師器底部は、回転ヘラ切り痕が認められ、底部全体と底部周縁にかけて、ヘラによる再調整が施されている。第2号掘立柱建物址P-7柱痕跡からは、たつき目文のある須恵器片が出土している。この掘立柱建物址が構築されたのは、真間期末葉から国分期にかけての時期と考えられ、住居址の構築時期とほぼ同時期と思われる。

溝状遺構については、第1号住居址の中央を切っていることや、ほぼ直角に近い状態で交わっ

ていることなどから、畑、山林等の地割り溝の可能性が強い。現在まで使用されていた畑の地割りに近い状態で掘られている溝もある。

特殊遺構の所在する周辺は、古老の話によると戦前まで建物がああり、一時学校の裏介場でもあったとのことである。

今回検出した遺構は、この台地全体に広がる集落の一部と考えられ、この周辺の調査が進み研究が加えられる過程において、全容が解明されると思われる。 (溝口)

## 参 考 文 献

- 八幡一郎・岡崎文喜他『海老ヶ作貝塚』船橋市教育委員会 昭和47年  
千葉県文化財センター『千葉市中野僧御堂遺跡』昭和51年  
八幡一郎・西野元・岡崎文喜『高根木戸』船橋市教育委員会 昭和46年  
千葉県加曾利貝塚博物館『加曾利貝塚Ⅰ 博物館調査資料』昭和42年  
杉山莊平『茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報』史観72 昭和40年  
岡本 勇『横須賀市吉井城山第1貝塚の土器』横須賀市博物館研究報告7号 昭和38年  
栗原文蔵他『大蔵遺跡』新修世田谷区史付編 昭和37年  
沼沢 豊『松戸市全橋台遺跡』昭和49年  
おおびた遺跡調査団『おおびた遺跡』八千代市教育委員会 昭和50年  
名主山遺跡調査団『名主山遺跡』昭和47年  
上高野原古墳群発掘調査団『村上供養塚発掘調査報告書』八千代市教育委員会 昭和49年  
八千代市船田遺跡調査会『船田Ⅰ』昭和45年  
山田遺跡調査団『山田水呑遺跡』昭和52年  
八千代市中世館址調査団『八千代市中世館城址調査報告書』昭和51年

# 写 真 图 版

第1図版 遺跡付近航空写真



## 第2図版 遺跡全景



1. 北側より遺跡を望む



2. 東側より遺跡を望む



3. 西側より遺跡を望む

第3図版 発掘風景



#### 第4図版 グリッド開設状況

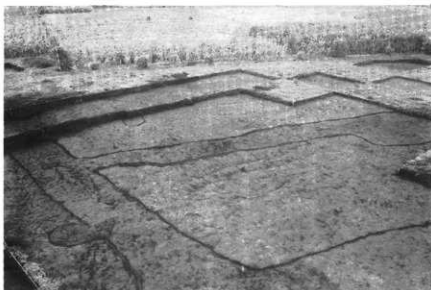


1. 全グリッド完掘状態

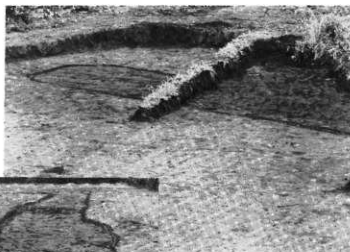


2. 一部遺構確認状態

第5図版 遺構確認状態



1. 溝状遺構の落ち込み全景



2. 溝状遺構の落ち込み近景



第6図版 第1号住居址



1. 遺物出土状態



2. カマド付近遺物出土状態

第7図版 第1号住居址



1. カマド除去後の状態

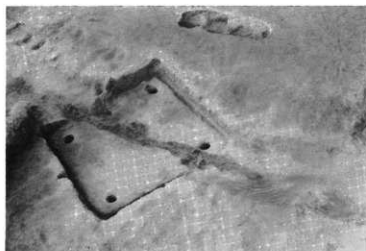


2. 竈出土状態



3. 壺出土状態

第8図版 第1号住居址



1. 住居址全景

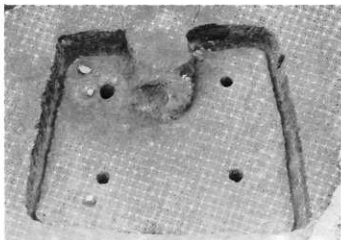


2. 住居址と溝状遺構



3. 住居址と溝状遺構の切り合い状況

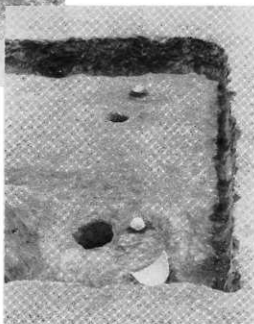
第9図版 第2号住居址



1. 遺物出土状態



2. カマド左側遺物出土状態  
(南東より)

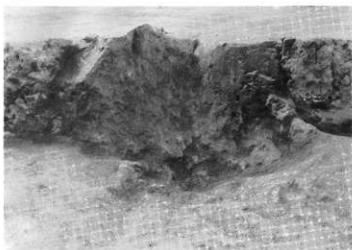


3. カマド左側遺物出土状態  
(北西より)

第10図版 第2号住居址



1. カマド

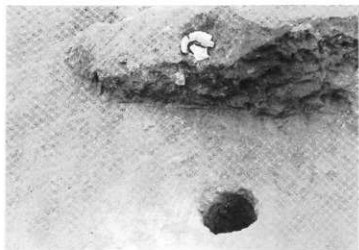


2. カマド掘り方

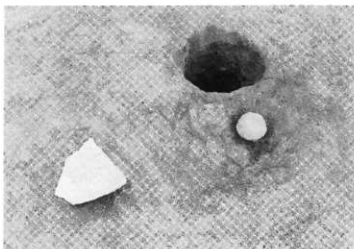


3. カマド縦断面

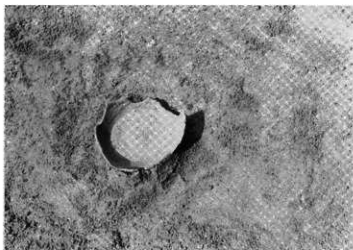
第11図版 第2号住居址



1. 甗出土状態



2. 埴・甗出土状態

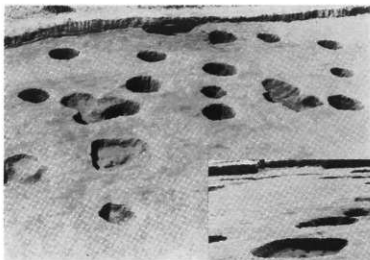


3. 坏(須惠器)出土状態

第12図版 掘立柱建物址



1. 全 景



2. 近 景 (南より)



3. 近 景 (北より)

第13図版 掘立柱建物址



1. 第1号掘立柱建物址P-4

土層断面(上)

柱痕確認状態(右)



2. 第1号掘立柱建物址P-3

土層断面(上)

柱痕確認状態(右)





第14図版 掘立柱建物址



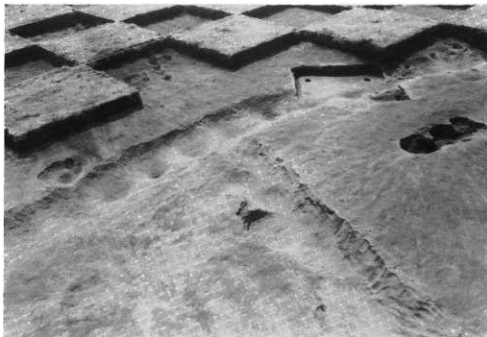
1. 第1号掘立柱建物址P-5  
土層断面及び遺物出土状態



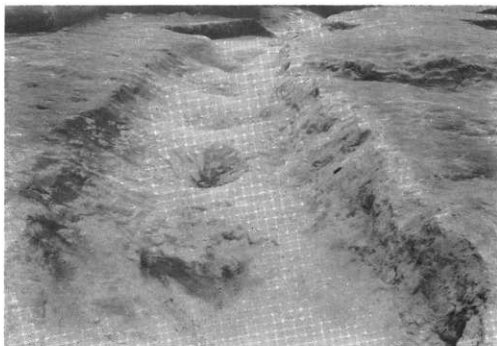
2. 第2号掘立柱建物址P-4  
土層断面(上)  
柱痕確認状態(右)



第15図版 溝状遺構



1. 全景

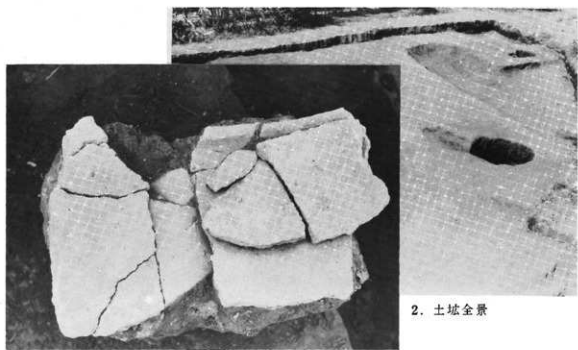


2. 近景(南より)

第16図版 溝状遺構・土坑



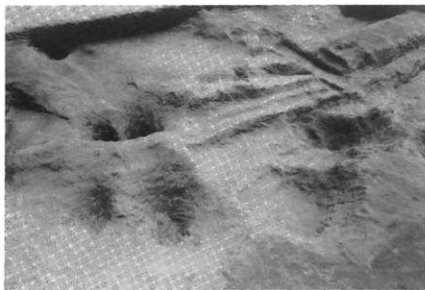
1. 溝状遺構出土獣骨



2. 土坑全景

3. 土坑内出土縄文式土器

第17図版 特殊遺構



1. 全 景



2. 溝状遺構-3  
近景(東より)



3. 溝状遺構土層断面

第18図版 特殊遺構



1. 縄文式土器出土状態

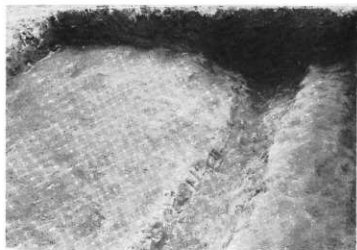


2. 石斧出土状態



3. 内耳出土状態

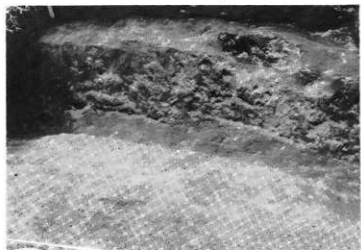
第19図版 グリッド



1. C-4 グリッド



2. H-5 グリッド



3. C-6 グリッド

第20図版 遺構全景

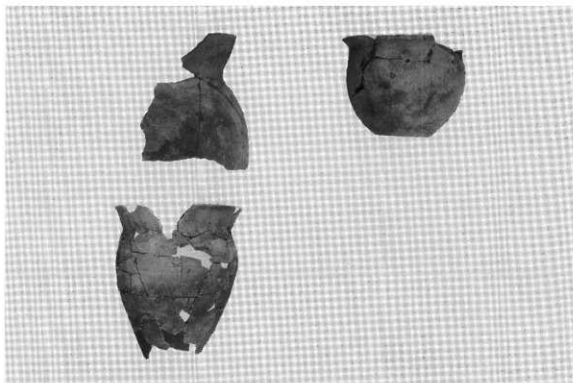


1. 住居址及び掘立柱建物址全景  
(南より)

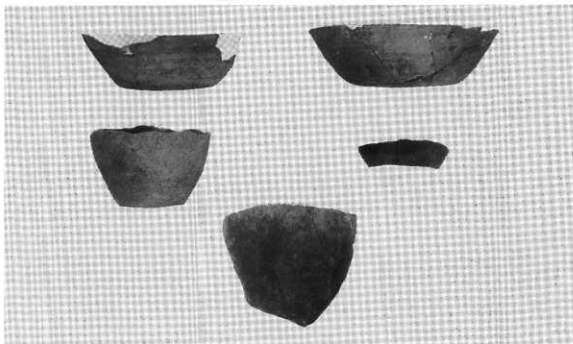


2. 住居址及び溝状遺構全景(東より)

第21図版 住居址内出土遺物



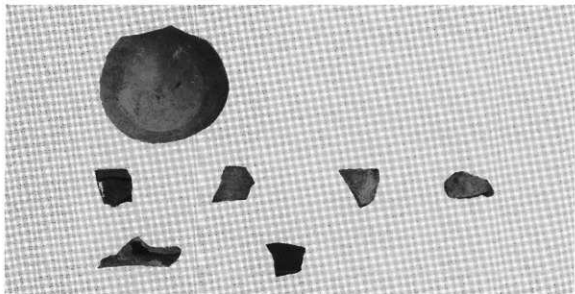
1. 第1号住居址出土遺物



2. 第2号住居址出土遺物



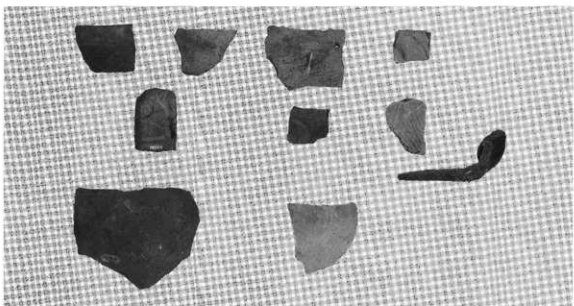
第22図版 掘立柱建物址・溝状遺構及び特殊遺構出土遺物



1. 掘立柱建物址出土遺物

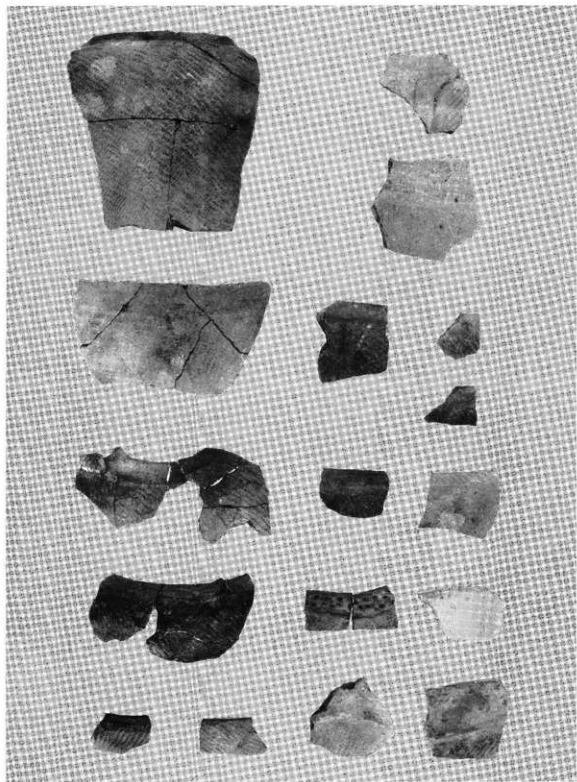


2. 溝状遺構出土遺物

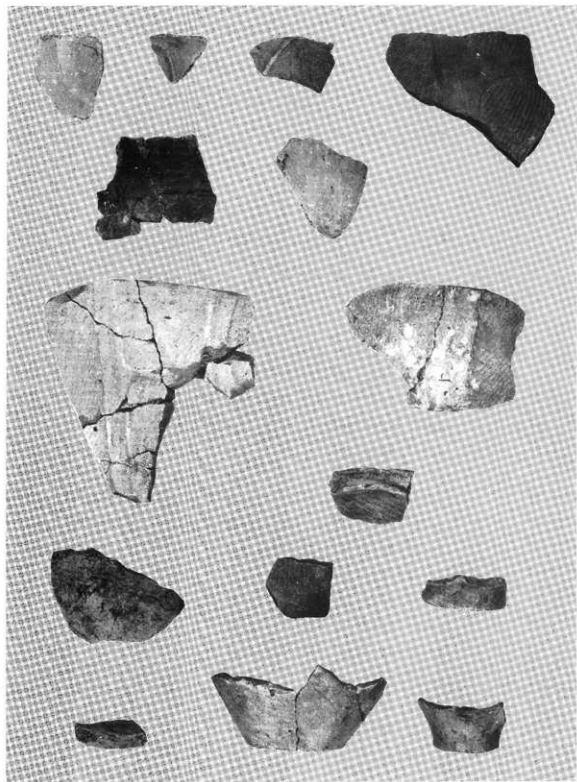


3. 特殊遺構出土遺物

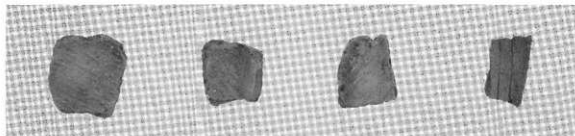
第23図版 土埴出土遺物



第24図版 土坑出土遺物



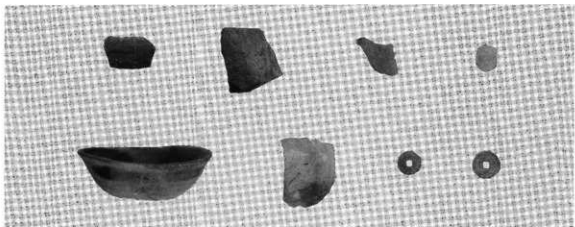
## 第25図版 土坑出土遺物及びその他の遺物



1. 土坑出土遺物



2. グリッド内出土遺物



3. 表採その他の遺物

## 桑納前畑遺跡

---

八千代市立睦小学校校舎改築工事に伴う発掘調査報告書

印刷 昭和53年3月20日

発行 昭和53年3月31日

発行者 睦小学校北方遺跡調査会

編集者 睦小学校北方遺跡調査会

印刷・製本 大和美術印刷有限公司

---